

5. FIFA U-17 女子ワールドカップ ニュージーランド 2008

1) 大会全般

① 大会概観

初めて実施された、FIFA U-17 女子ワールドカップ ニュージーランド 2008(FIFA U-17 Women's World Cup New Zealand 2008)は、各大陸を勝ち抜いた 15 カ国と開催国のニュージーランドの 16 カ国が参加して、2008 年 10 月 28 日から 11 月 16 日までの期間で合計 32 試合が、オークランド、ウェリントン、ハミルトン、クライスト・チャーチの 4 都市で行われた。初夏を迎えるニュージーランドは寒暖の差が大きかったが、素晴らしいスタジアムと絨毯のような芝上で、技術と戦術を発揮できるコンディションであった。

大会参加 16 チームを 4 グループに分けて予選リーグを行い、上位 2 チームが決勝トーナメントに進出した。決勝トーナメントには、A グループ:デンマーク、カナダ、B グループ:ドイツ、DPR.K、C グループ:日本、アメリカ、D グループ:韓国、イングランド(グループ順位順)が進出した。記念すべき第 1 回大会のファイナルは、AFC チャンピオンの DPR.K と CONCACAF

チャンピオンのアメリカの対戦となった。結果は、1 点を争う好ゲームを展開、延長後半にクリーンシュートを決めた DPR.K が 2-1 で勝利し、初代チャンピオンとなり、大会の幕を閉じた。



大会回数	第 1 回
開催国	ニュージーランド
開催期間	2008 年 10 月 28 日 ~ 11 月 16 日
参加チーム数 [アジアからの参加国]	16 チーム [日本・DPR.K・韓国]
大会成績	優勝: DPR.K 準優勝: アメリカ 第 3 位: ドイツ 第 4 位: イングランド
日本の成績	ベスト 8
日本の試合結果	◆グループリーグ 10 月 30 日 ○ 3-2 (1-1) アメリカ 11 月 2 日 ○ 7-1 (6-1) フランス 11 月 5 日 ○ 7-2 (3-1) パラグアイ ◆準々決勝 11 月 9 日 ● 2-2 (1-1) PK4-5 イングランド
次回開催	2010 年トリニダード・トバゴ

② 大会結果

大会のベスト 8 に進出したのは、UEFA:3(ドイツ、イングランド、デンマーク)、AFC:3(DPR.K、韓国、日本)、CONCACAF:2(アメリカ、カナダ)という内訳であった。準々決勝は、ドイツ、イングランド、アメリカ、DPR.K がそれぞれカナダ、日本、韓国、デンマークを下した。準決勝は、DPR.K が 2-1 でイングランドを下し、アメリカが同じく 2-1 でドイツを下し、ファイナルへと進んだ。3 位決定戦は、3-0 でドイツがイングランドを下し、決勝は、DPR.K が延長戦の末アメリカを下し、初代チャンピオンに輝いた。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

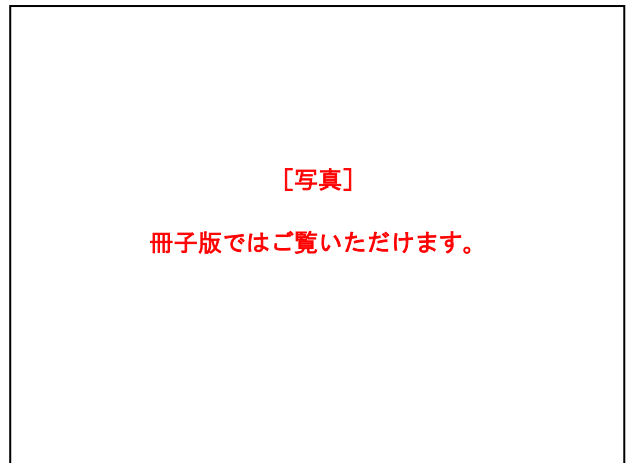
2) 大会全般

① AFC [アジアサッカー連盟]

AFCの3チームはいずれも、攻守ともにオーガナイズされており、世界のトップと戦う力を有していた。

優勝した DPR.K は 1-4-4-2 のシステムで、4DF はフラット、4MF はダイヤモンド、2 トップは横並びの伝統的なシステム。① YUN Hyon Hi がトップに張り、⑩ JON Myong Hwa はフレキシブルに動く。⑥ KIM UJ の展開力と⑨ HO Un Byol のトリブルの仕掛けから 2 トップにボールを入れ得点を狙う。守備は、アプローチスピードが速く、前線からチェイシングを行い、全員がハードワークする。GK も守備範囲が広い。そのうえ、平均身長が 170cm 弱と大柄な選手を揃えていた。大会を通しての走力に優れており、その運動量のもと 90 分間(延長は 120 分間)、攻守ともに切り替えの早いダイナミックなサッカーを展開した。

韓国は 1-4-2-3-1 のシステム。攻撃はスキルフルな⑩ Ji So Yun を中心に、スピードとテクニックを有する① PARK Hee Young、ターゲットプレーヤーの⑱ LEE Min Sun が軸となり、守備的な MF の⑥ LEE Young Ju、⑰ LEE Mi Na が DF の背後にスルーパスやサイドのスペースへ展開する。守備は、センターDF の⑳ SHIN Mi Na、㉑ KOH Kyung Yeon が全体をコントロールする。切り換えが早く、アプローチが速い。4DF はラインコントロールを



[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

行う。

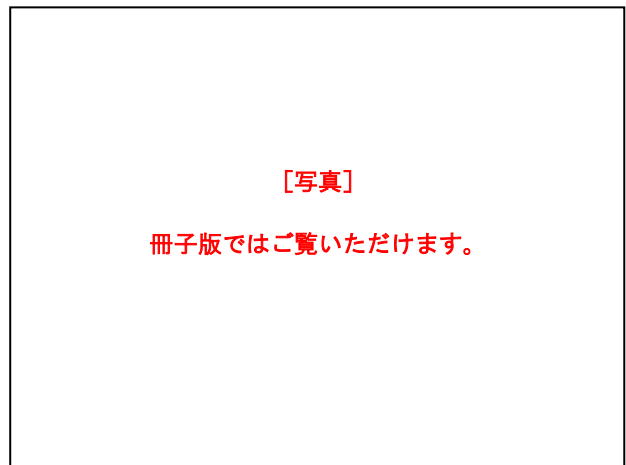
日本は 1-4-4-2 のシステム。2 トップの⑨ 吉良知夏、⑩ 岩渕真奈はテクニック・スピードに優れる。ボランチ⑥ 亀岡夏美、⑦ 嶋田千秋は、プレーメイクに優れ、まさしく「人とボールが動く」サッカーを展開した。守備はファーストディフェンダーを徹底し、その間に守備ブロックを形成する。切り替えは早い。3 ラインをコンパクトにし、ボール保持者にプレスをかけて、選択肢を狭めてボールを奪うチャンスを作り出していた。

② UEFA [欧州サッカー連盟]

UEFA の 4 チームは、それぞれがその国のサッカーを展開しようと試みていた。3 チームがトーナメントに進出したが、グループリーグで敗退したフランスも有力なチームであった。

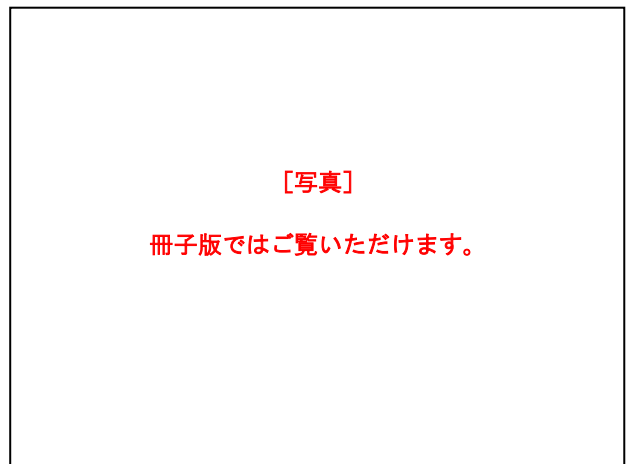
3 位のドイツは 1-4-4-2 のシステム。チームのシェイプが整っており、全員がハードワークする。攻撃の軸となる⑩ Dzsenerifer MAROZSAN は、テクニックに優れ、運動量が豊富、そしてキックの質も高く、決定力を有している。守備的 MF ⑥ Marie-Louise BAGEHORN、⑧ Lynn MESTER は展開力に優れている。スルーパスを中央、サイドに出し、キックの質は高い。両サイドは MF・DF ともに突破力を有している。動き出しのタイミングも良い。幅と深さを使い、ダイナミックなサッカーを展開する。守備は、ファーストディフェンダーを徹底。2 トップは縦を押さえ、サイドに出させて、ボールを奪う。各ラインから縦にボールが入ったら、プレスバックして W チームを組みボールを奪う。DF ラインは、基本は受け渡しだが、センターは③ Inka WESELY がマンマーク、④ Valeria KLEINER がカバー・スペースを押さえる。ともに人に強く、高さにも強い。グループでのチャレンジ&カバーが徹底している。GK は守備範囲が広く、クロスに強い。

4 位のイングランドは 1-4-4-2 のシステム。攻撃は、守備的 MF ⑩ Isobel CHRISTIANSEN、⑧ Jordan NOBBS がプレーメイクする。スピードと得点力のある⑨ Danielle CARTER を活かした中央突破やサイド MF の① Lucy STANFORTH、⑦ Rebecca JANE、⑱ Lauren BRUTON は、突破力が有りチャンスメイクする。守備はセンターDF ⑤ Jodie JACOBS、⑥ Gemma BONNER が全体をコントロールする。3 ラインを保ち、サイドが縦にスライドし、相手



[写真]

冊子版ではご覧いただけます。



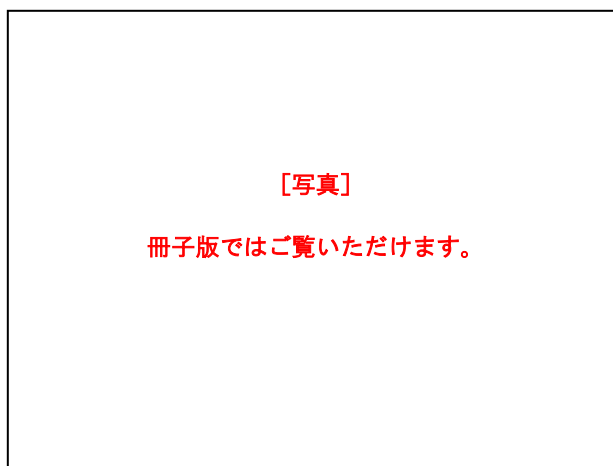
[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

に対して素早くアプローチし、チーム全体がよくオーガナイズされており、ボールを奪っていた。

デンマークは 1-4-2-3-1 のシステム。攻撃は基本的なテクニックを有し、ショートパスを主体にポゼッションプレーを展開する。プレーメーカーは⑫Pernille HARDER。動きながらのテクニックを持ち、ボールを失わない。周りをよく観てプレーする。チャンスメークは、左ワイド MF⑧Katrine VEJE。アグレッシブでスピードを活かした突破力がある。4DF は幅を取り、ビルドアップする。守備的 MF は、ボールにかかわり、組み立てる。1 トップ⑬Linette ANDREASEN は基本スキルを有し、ターンが上手くシュートを狙う。守備は、全員が規律を持ってハードワークする。4-5 の守備ブロックを形成し、相手のプレーを遅らせた後、中央へのパスを牽制しながらサイドへパスを出させてボールを奪う。

フランスは 1-4-2-3-1 のシステム。3 ラインをコンパクトにプレーし、全員がかかわりを持ってプレーする。攻守の切り換えが早く、トランジションモメントを理解している。攻撃は、GK を含めたゲームコントロールでポゼッションプレーを展開する。⑩Solene BARBANCE を中心に中盤が組み立てを行い、複数のプレーヤーがかかわり、スピードアップのタイミングを共有している。DF ラインのビルドアップ、守備的 MF のポゼッション能力がある。GK のキックが良く、攻撃の起点となる。全体的に選択肢を持ったプレ



【写真】

冊子版ではご覧いただけます。

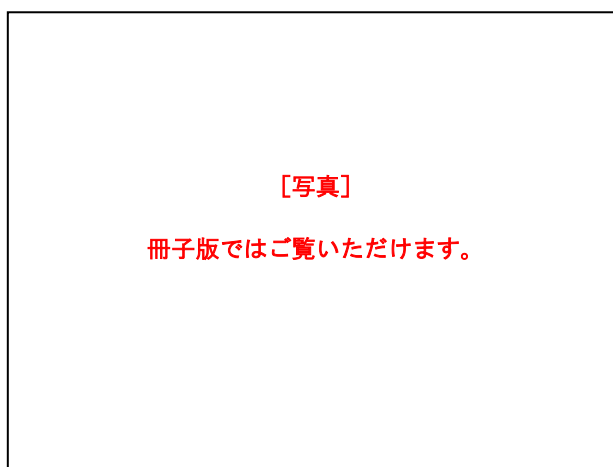
ーを行う。守備は 4-5 の守備ブロックを形成し、ファーストディフェンダーのアプローチからボールを奪うチャンスを作り出す。GK の守備範囲が広く、基本テクニックも良い。日本戦では、立ち上がりはお互いにコンパクトな攻守の切り替えの早い好ゲームであったが、前半半ば過ぎから日本の攻撃力に守備が崩壊し大量失点したため、アメリカと得失点差でトーナメント進出を逃したが、力のあるチームであった。

③ CONCACAF [北中米カリブ海サッカー連盟]

CONCACAF の 3 チームは、北米のアメリカ、カナダはスピードとパワー系の能力をチームの中心戦略に据えた個で仕掛けていくサッカー、中米のコスタリカは個人のテクニックをチームのベースにおいたサッカーを展開した。

準優勝のアメリカは 1-3-2-3-2 のシステム。グループリーグでは個のスピードとパワーを活かしたサッカーに固執し、グループやチームでのまとまりに欠けていたが、トーナメントに入ってからチームとしてのまとまりが生まれ、全員がハードワークし、個人のスピードとパワーそして豊富な運動量でファイナルに進出した。攻撃は、⑩Kristie MEWIS を中心に、サイドのスペースを利用してオーソドックスに展開した。2 トップの⑧Vicki DIMARTINO は、突破力と 5 試合連続得点と決定力があり、⑦Courtney VERLOO は高さスピード、テクニックを有していた。守備はディフェンスリーダーの⑥Cloee COLOHAN を中心に、前線からアプローチを素早く行い、相手の選択肢を少なくしてボールを奪う意識が高い。守備的 MF②Lexi HARRIS は身体能力高く、アジリティも良い。

カナダは 1-4-2-1-3 の伝統的なシステムで、3 トップとトップ下の 4 人は身体能力の高いプレーヤーを揃えていた。攻撃は、3 トップに対してダイレクトプレー。トップ⑫Nkem EZURIKE をターゲットに楔、両ウイングのスピードを活かしたスペースへの展開となる。攻撃はシンプルで変化はほとんどない。守備はボールを失うとすぐに奪い返すアクションを起こす。アプローチの意識が高い。1 トップを残し、4-5 の守備ブロックを形成する。センター DF⑪Karli HEDLUND、⑫Lauren GRANBERG は、互いにチャレンジ&カバーを理解し、動き出しが早い。高さへの対応も良い。中盤の⑬Danica WU はハードワークする。小さいが予測力に優れ、セカンドボールを拾う。そして、全員がタイトにプレーする。



【写真】

冊子版ではご覧いただけます。

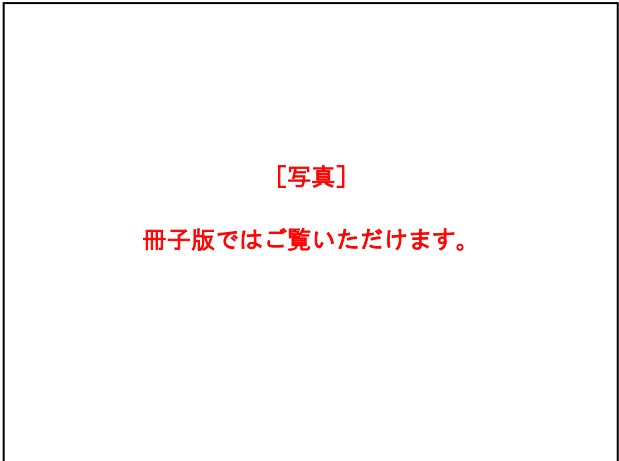
コスタリカは 1-4-4-2 のシステム。身体能力は高くないが、個人のテクニックをベースにチームで戦う。DPR.K 戦は、好ゲームを展開していたが、残念ながら終盤は運動量が見るからに落ちてしまった。この年代での、トレーニングの量が不足しているように感じられた。攻撃は個人のテクニックをベースに、チームでボールを失わない。ドリブル or パスの選択肢を常に持ってプレーしている。相手を見て逆を取りながら駆け引きしてプレーし、相手 DF に的を絞らせない。また、アイデアが豊富である。守備は、ゾーンの意識を持ちながらマークの受け渡しを行い、DF ラインは常に 1 人余らせる形を作っていた。ボールに対しては必ずファーストディフェンダーがアプローチをかけ、自由にプレーさせない。カバーリングプレーヤーがいなときは間合いを取り、スピードアップさせない。このように意図的にボールを奪うチャンスを作り出していた。

④ CONMEBOL [南米サッカー連盟]

CONMEBOL は 3 チーム参加していたが、いずれのチームもトーナメントに進出できなかった。ブラジル、パラグアイともに、個人のテクニックは高かったが、チームとして攻守に機能せず、グループリーグで敗れた。(コロンビアは視察できなかったため、記載せず。)

ブラジルは 1-4-4-2 のシステム。個人テクニックがベースで、ポゼッションプレー主体。攻撃は幅を取り、ボランチの⑤BRUNA、⑮JULIANA CARDOZO がプレーメイクし、2トップ⑨RAQUEL、⑳ANA CAROLINE とアタッキング MF の⑦THAIS、⑱JULIANA が流動的に動く。初戦のイングランド戦前半 18 分にエース⑩BEATRIZ が肩をケガしてしまい、攻撃の起点を失ってしまったのが残念である。守備はスウィーパーシステムを取り、タイトなマンマークでプレーする。

パラグアイは 1-3-4-3 のシステム。個のテクニックを活かしながらポゼッションプレーを展開する。攻撃は、3DF ③Cris Mabel FLORES、⑤Paola GENES がビルドアップ能力を有しており、キックの質が高い。ボランチ⑧Paola ZALAZAR がプレーメー



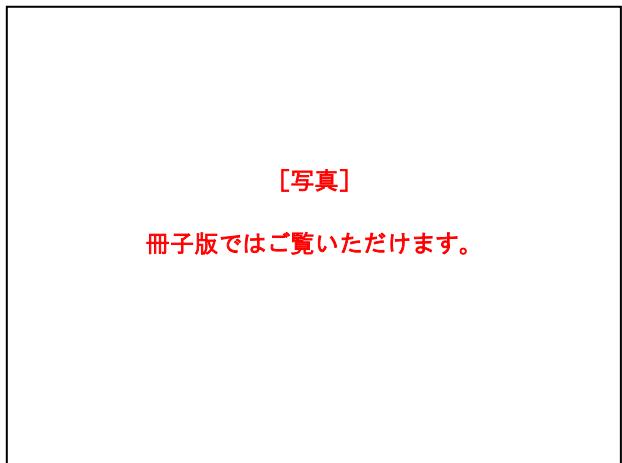
ク。3 トップはテクニックに優れ、フレキシブルに動く。守備は、3DF の 2 人がマンマーク、1 人がカバーリング。4MF はフラットで 3-4 の守備ブロックを形成し、ボールを奪うチャンスを作り出す。

⑤ CAF [アフリカサッカー連盟]

CAF はナイジェリアとガーナが出場した。ともに優れた身体能力を持ち、個人のスピード・テクニックを有する。いずれもトーナメントに進出できなかったが、今後の大会において急成長する可能性が高い。

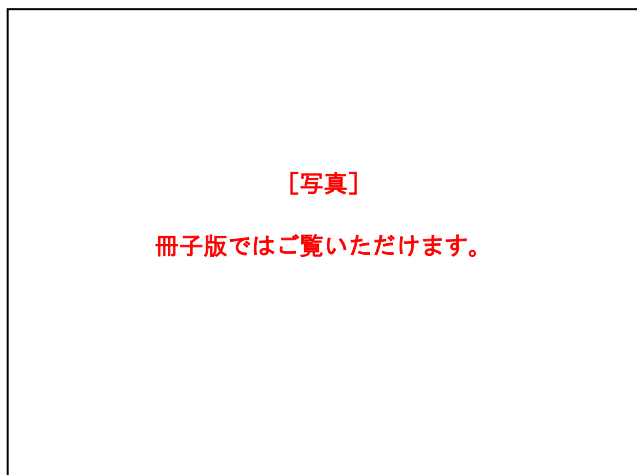
ナイジェリアは 1-4-1-4-1 のシステム。個人テクニックがベースでスピードがあり、身体能力が高い。ボールが来る前によく観て、サッカーを感じている。攻守ともにグループ・チームでプレーしようとする。攻撃は個人スキルが高く、ボールが動いている間の動き出しのタイミング、スピードアップが良い。ゴールへの仕掛けが早く、常にゴールを意識してプレーする。守備は 1 対 1 の対応力・カバーリング能力が高い。

ガーナは 1-3-4-3 のシステム。個々の能力を活かしたプレーを展開する。攻撃はしなやかな身体とスピードを有してドリブル主体で攻撃する。シュートポイントに入るスピードは速い。守備は 1 対 1 の対応は粘り強く対応できる。



⑥ OFC [オセアニアサッカー連盟]

OFCは開催国のニューージーランドが出場したが、視察できなかったため、記載せず。



3) 日本の戦い

① 大会に向けた強化

2007年3月にAFC U-16選手権大会が開催された。選手たちは中学3年生がほとんどで、受験のため強化合宿に招集できない選手がいたり、所属チームでのトレーニング不足があったり、また時期的にインフルエンザの流行などもあり、強化が難しかった。

AFCの大会を含めてトレーニングキャンプは5回、約40日間活動し、うち1回はオーストラリアのユースオリンピック大会に参加した。海外遠征が初めてという選手が多く、3月に行われるAFC選手権大会(マレーシア)のシミュレーションとして、1月のシドニーの暑さと大会を経験できて良かった。

AFC U-16選手権大会はクアラランブールで行われ、準決勝で中国を破り、FIFA U-17女子ワールドカップ2008の出場を決め、決勝ではDPR.Kに敗れ2位となった。

出場を決めてから本大会までは約1年半の期間があり、定期的に強化合宿を行い、また2007年夏にアメリカ、2008年にオーストラリアへの海外遠征を実施し、選手たちがワールドカップを目標に所属チームでも自分たちの課題に取り組んだ。選手それぞれがテクニックや体力的な課題を明記して常に意識し、代表チームと所属チームが連携をとって進めたことは有効だった。

なでしこリーグに出場している選手、岩渕(日テレ・ベレーザ)・井上(ジェフユナイテッド市原・千葉レディース)・亀岡(大原学園 JaSRA 女子サッカークラブ:特別指定選手)は、その伸びも顕著であった。また、大分国体で優勝した埼玉選抜で左サイドバックとして出場した竹山は、本来はサイドハーフであるが国体での経験がワールドカップにつながった。

② 日本の戦い

-1 グループリーグ: vs アメリカ

グループリーグ第1戦は、優勝候補アメリカと対戦した。女子は今まで全てのカテゴリーにおいて、公式戦でアメリカに勝利が無く、強豪アメリカにどの程度戦えるか興味深かった。

試合開始早々に相手のロングスローから、GKと相手選手が交錯した中で失点した。いやな流れとなったが、徐々に日本らしいパスワークを駆使し、ゴールチャンスを多く創った。同点弾はMF 嶋田の思い切りの良いミドルシュートがバーに撥ね返り、その直前からリバウンドを予測して素早く反応した岩渕がしっかり決

めた。後半も1点先行されるが、亀岡のロングシュートが決まり同点にし、交代出場した吉岡が逆転ゴールを決めた。

日本はチャンスを多く創り、シュート数は20対9と上回って内容的にもゲームを支配できた。しかし、パスが弱かったりリファーストタッチが悪かったりボールを失う場面も多く、GKとDFの連携が悪く危ない場面もあった。1対1の守備、リスタートの守備も改善したい。良いプレーやチャンスも数多く創り、3対2で試合に勝ちながらも課題も出た試合だった。

-2 グループリーグ: vs フランス

相手のシステムは1-4-2-3-1で日本とほぼマッチアップする形で、GKをはじめセンターラインに好選手を揃えていた。前半から攻勢を仕掛ける日本は、相手を翻弄してゴールラッシュした。攻撃陣がタイミング良く縦横に動いて、パスワークも弾けるようにゴールチャンスを創造し、フィニッシュの質も良く、吉良がハットトリックを達成した。

ヨーロッパ2位でワールドカップに出場したフランスに7-1で大

勝した。攻撃面では非常に良かったものの、守備面で基本が徹底されていないことや、攻守においてGKとDFの連携がまずいという課題も残った。

-3 グループリーグ: vs パラグアイ

グループリーグ2連勝で準々決勝進出を決めて、第3戦のパラグアイ戦はサブメンバー主体としたが、グループリーグ1位突破を狙って臨んだ。サブにも経験させることとレギュラーメンバーを休ませる目的だったが、試合はいつもと違いギクシャクしていた。CBが退場処分を受け、しかもPKを決められ1点を追う形となったが、逆に緊張が解け、動きが良くなった。結局7-2の大差でパラグアイを退けた。

この結果グループリーグ3連勝で、狙い通りCグループ1位となり、準々決勝はDグループ2位イングランドと対戦することになった。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

-4 準々決勝：vs イングランド

イングランドはグループリーグ 2 連勝の第 3 戦、韓国に 3-0 で敗れて 2 位となった。日本は 3 連勝で 17 得点 5 失点という、参加国で得点力が一番あった。韓国に負けたイングランドを軽視したことは無いが、どこかに隙があったのではないだろうか。逆にイングランドは、闘志を燃やして挑むという心構えがあったと思われる。

イングランド戦は前半先制したがロスタイムで同点にされ、後半 37 分に勝ち越したもののまたロスタイムに追いつかれ、延長戦後 PK で敗れた。この試合で目についたのは、イングランドの選手たちの日本を自由にさせない、彼女たちのスピード・パワー・リーチを生かした厳しいディフェンスだった。決して負けたく

ないというメンタリティを発揮していた。それに比べると日本はボールを奪い合う場面で、身体を張らず軽かった。大事な試合において軽いプレーでは、ボールを失うし、奪うこともできない。また正しいポジショニング、アプローチ・カバーリングの速さなど、守備の基本の大切さを学ばなくてはならない。

残念ながら、日本のベスト 4 進出はならなかった。しかし世界を相手に、日本の特長を発揮して評価できる部分と、スピード・パワー・リーチの差にどのように対抗するかという課題を見出した。この差は、日本の女子サッカーが世界を相手にするときの永遠の課題である。

③ 日本の成果

-1 テクニック

この年代でテクニックは世界のトップクラスにある。ボールコントロール、パスなど正確に速くプレーすることができる。吉田監督は「観て、感じて、プレーする。」ことを強調して、状況によりボールとともにターンする技術は、今大会では世界一だったと言える。前を向いて仕掛ける、一瞬の隙を逃さずシュートやパスにつながる技術は、今後も磨いて欲しい。

DF でも仕掛けることができないと上の世代で成功しないという

考えから、DF が判断なしに蹴ってしまうことも矯正しようとした。勝つことばかりにこだわるとこのような指導はできないが、選手の今後、日本の将来を考えると手本となる指導である。

日本では 12 歳以下の少女が男子と一緒にプレーする傾向が年々高くなっており、男子とトレーニングすることもテクニックや判断力のレベルアップにつながっていると思われる。

-2 攻撃のアイデアとフィニッシュ

攻撃力のある嶋田とバランスの取れる亀岡をボランチに起用し、岩淵・吉良の 2 トップ、サイドハーフ左に齊藤、右に井上、左サイドバックは本来攻撃的な左利きの竹山を配置し、お互いにタイミングを計れる選手たちが、意外性のあるアイデア溢れるコンビネーションで躍動した。またセンターバックのポジションでラ

ストパス
やためを
作ったの
が岸川で、
リスタート
から 4 得
点し攻撃
力のある

ところを示した。

4 試合で 19 得点は素晴らしい出来だった。まだまだフィニッシュの正確さは磨かなくてはならないが、チャンスを多く創り積極的にフィニッシュする姿勢は、今までに無いものだった。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

-3 個々の課題改善のためのアプローチ

監督が中心になり、選手個々の課題の改善に所属チームと連携して取り組んだ。それぞれの選手が、「自分の課題は何か、日々どのように取り組むか。」を明記して、所属チームでも日常的に課題改善のトレーニングを実践した。例えばある選手は、クラブに所属しているがトレーニングが週に3回しかなく体力的な

課題が浮き彫りになった。吉田監督はクラブの監督と相談して、所属高校の男子と一緒にトレーニングすることや自宅周辺での持久走などを本人の理解の上で実践させた。

選手たちの体力的な面の向上は、トレーニングキャンプごとのフィジカルテストによって確認された。

-4 メディカル面のアプローチ

女子選手はひざの深刻なケガが多いため、予防のトレーニングを日常的に取り入れた。ウォーミングアップの前は必ず選手それぞれが実践した。またこの年代は貧血の選手が多く、分からないままできるとそのパフォーマンスに影響して選手を正当に評価できない。そのため貧血の検査を実施、その結果により必

要な選手は適切な処方により改善させ、パフォーマンスを向上させた。

今回活躍した選手の中には、貧血を克服した選手がいた。貧血が隠れていると、能力の高い選手がやる気が無いとみなされるケースが多い。今後もこの年代は気をつけたいものである。

④ 日本の課題

-1 スピード・パワー・リーチの差にどのように対抗するか

日本が世界と戦うときに、スピード・パワー・リーチの差(体格・体力の差)は永遠の課題である。この差に対抗するために、「観ながら・頭を働かせ・動きながらプレーすること」が重要である。例えば「よーいドン」で競争したらかなわないが、少しでも良いポジションから動きながら走れば相手よりも早く目標に到達できる。

「観ながら・頭を働かせ・動きながらプレーすること」と正確で速いテクニックで、スピード・パワー・リーチの差に対抗できる。

そして重要なのは、体格・体力の差を恐れず挑んでいくメンタリティで、ボールを奪い合う場面では身体を張る勇気が必要である。

-2 守備の基本

素晴らしい攻撃面に比較して、守備のポジションに関してはタレントが少なく、守備の基本が習得できていないというのが正直な感想である。守備の基本を重視して、この年代でもやってい

かなくてはならない。またリーチの差を補うスライディングタックルの技術は、身に付けておきたい。

-3 ゴール前の攻防

ゴール前の攻防は常に課題として取り組まなくてはならない。得点は多かったが、フィニッシュの技術は改善の余地がまだある。守備においても「観ながら・頭を働かせ・動きながらプレーすること」を意識して、常に正しいポジション、速いアプローチ・カバーリングを徹底させたい。ゴール前の攻防をもっとトレーニングに取り入れる必要がある。

ストライカーはシュートばかりでなく、DFラインを突破する工夫やオフサイドにかからないようにラインを

観ながらタイミングを計るなど習慣化したい。

また、育成年代、特に12歳以下は少人数(8対8など)の試合で、ボールを扱う機会やゴール前のプレーを多くして改善したい。

-4 コミュニケーション

サッカーはグループで勝敗を競うのに、自分の意思を伝えない選手が多い。監督の話や指示に反応しない、ミスを謝らない・要求しない、直前の合宿でさえ意思を伝えない選手が多いのには驚いた。ミスがどうして起きたのか分からずじまいでは進歩は無い。選手が考えないでプレーするのは、選手たちが指導者に依存して自立していないのか、指導者が一方的な指導になっていないか、気をつける必要がある。自立してコミュニケーションの取れる選手の育成を目指したい。

[写真]

冊子版ではご覧いただけます。

4) まとめ

FIFA U-17 女子ワールドカップは、ニュージーランドの素晴らしい環境下で充実した大会となった。今大会が初めての開催であり、強化ばかりでなく育成の観点でも、日本の現在地を確認する上で重要な大会となった。

参加チームはいずれもその国のトップチームをイメージさせるサッカーを展開し、大人のサッカーの入り口として世界の動向を確認することができた。しかし、トップチームと同じコンセプトで「攻守において切り替えの早い、コンパクトなサッカー」を目指すものの、この年代がゆえにまだまだ改善しなければならないプレーも多く出現した。今大会に出場した選手たちが、母国に戻り、所属チームでトレーニングを積むことにより、次のカテゴリーである FIFA U-20 女子ワールドカップでは、大きな成長を遂げるであろう。

ただし、その成長度合いは各大陸で異なってくると思われる。というのは、おかれている環境で差が出てくる。つまり、UEFA で実施されているようなリーグ戦文化がその差を生み出すのである。今大会に出場したドイツは、ブンデスリーガとしてすでに女子のリーグ戦が存在し、毎週のように公式戦が行われている。また、出場していないスペインでもリーグ戦が実施されている。エスパニョールでは、女子が6チーム(トップからジュニアまで)あり、それぞれがリーグ戦を行っている。このように、毎週のように実

施される公式戦を通して、「サッカーをどう戦うか」ということについて選手も指導者も育成・養成されていくのであろう。

今大会、日本は準々決勝において2-2の同点による、PK戦の末イングランドに敗れた。2失点のいずれもがロスタイムによる失点であった。ゲーム中にいつ、だれが、どこで、何を、どのようにプレーするのか。ゲームを読んでプレーしていくためには、日々のコーチング(指導)とともに前述した試合環境の整備が必要であろう。日本において、女子のリーグ戦環境を即座に整備することは難しいが、男子のリーグ戦に参加させてもらうなど方法を生み出していくことは可能ではないか。

大会 MVP を岩淵真奈が受賞し、FIFA のテクニカルスタディグループは、岩淵のオフザボールの動き・ゲームを読む力・運動量と質・予測は、他のプレーヤーの模範となるであろうと述べた。すなわち、岩淵が世界のサッカープレーヤーの目指すべきプレーモデルであり、日本のプレースタイルが今後の女子サッカーの方向性を打ち出していると評されたのである。

このことは、日本の「育成」が正しい方向に向かって進んでいることを証明している。これからも指導者が情報を共有し、互いに学び、現在の「育成」をより向上させるように取り組んでいきたい。

U-17の年代で何をしていかなければならないか

U-17 日本女子代表監督 吉田 弘

2003年女子ワールドカップ、2004年アテネオリンピックに向けてなでしこジャパンを指導する中で、世界のトップ(ドイツやアメリカ)を相手に何をしなければならないか、ウィークポイントである身体の大きさ・パワー・スピードをどのようにカバーしていき、ストロングポイントであるアジリティ・持久力・テクニックをどのようにアピールしていくかを考えた。

身体の大きさはアジリティでカバーし、パワーは主軸を鍛える体幹トレーニングと下肢を強化し、ボディコンタクトで負けない身体づくりをする。

そして、テクニックで相手を上回ること自分たちがボールを保持する時間を増やし、守備している時間を短縮する。ただボールを回しているだけでは相手にとっての脅威にならないので、相手ゴールに向かってプレーする回数を増やす。

そのための技術の1つが「ターン」で、味方ゴールを向いていたプレーヤーがファーストタッチで仕掛けていければ、日本選手にとって優位な状況を作り出せる。実際、アメリカ・フランスは前に向かって守備は強いが反転する動きには弱く、非常に効果的であった。

ただボールを扱う技術はすぐ身につくものではない。ゲームやトレーニングで意識して使わなければ自分のものになっていかない。1人で突破する・壁パスでDFの裏をつく・ロングパスの技術などたくさんの課題はあるが、テクニックを磨くことで日本の特長を生かし、世界のトップクラスを目指したい。

